

発刊によせて

「質の高い成長」は、生産や所得の継続的な伸びを指標とする伝統的な成長の概念に包摂性や持続可能性、強靱性（レジリエンス）の観点を付け加えた新しい概念です。国全体の生産や所得を上げることを考えるのではなく、格差や雇用、環境問題、災害や経済危機といった人々の生活に直結する問題への対応や、それを支える制度や統治構造（ガバナンス）の改善にも目配りするかたちでの成長の実現を求めるものと理解されています。

「質の高い成長」に関する議論は国内外で盛んになっています。2010年のアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会議をはじめとする国際会議の場で「質の高い成長」に関する議論が行われ、その精神は2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に盛り込まれました。日本の開発協力政策である「開発協力大綱」も2015年の時点から重点課題の一つとして「質の高い成長」を掲げ、2023年の改定版もその方針を継承しています。国際協力機構（JICA）は、その開発協力大綱のもと「人間の安全保障」に加えて「質の高い成長」の実現をミッションに掲げ、開発途上国への開発協力を行っています。

今日、日本を含む世界各国が、気候変動や感染症といった地球規模の課題、ウクライナでの戦争やこれに伴う経済的なリスクといった複合的な危機に直面しており、「人間の安全保障」への脅威が日に日に高まっています。もちろん、各国における貧困や格差、雇用、環境問題といった従前からの課題に取り組むことの重要性も変わりはありません。このような状況のもと、包摂性、持続可能性、強靱性（レジリエンス）を兼ね備えた「質の高い成長」の概念に注目することの意義は、かつてないほど高まっているといえるでしょう。

「質の高い成長」は、その概念の新しさゆえに数多くの疑問を私たちに投げかけるものです。たとえば、「質の高い成長」が持つ包摂性や持続可能性、強靱性（レジリエンス）といった性質は具体的にどのようなものであり、伝統的な成長の概念とどのように結びつくのでしょうか。また「質の高い成長」の度合いを測ることはできるのでしょうか。そして何よりも「質の高い成長」を実現するため

にはどうすればよいのでしょうか。本シリーズは、上記のような問いに答えることを目的として刊行されるものです。

第1巻『質の高い成長概論』（編著：広田幸紀）は、「質の高い成長」の概念を経済学の理論を使って体系的に説明するとともに、その度合いを測る指標の構築に取り組むことで、「質の高い成長」についての包括的な解説を行うものです。また具体的な事例としてインドネシア、ベトナム、ペルー、コスタリカ、マダガスカルを取り上げ、「質の高い成長」の視点から見ると、各国の発展はどのように評価されるかを考察しています。

第2巻『SDGs、変革、質の高い成長』（細野昭雄）は、日本が開発途上国に対して行った開発協力の事例を分析することで、「質の高い成長」を実現するための方法論を検討するものです。「質の高い成長」と密接な関係にある概念として経済・社会の「変革」に着目し、各国の政策担当者や開発協力機関の実務者らがとりうる具体的な方策を考察しています。本書で取り上げる国際協力の具体的な事例は、アジアやアフリカ、ラテンアメリカ諸国における産業開発やインフラ開発、農業開発、都市開発など多岐にわたります。

本シリーズは、国際協力機構（JICA）緒方貞子平和開発研究所の「『質の高い成長』にかかる研究」プロジェクトの成果です。研究成果の取りまとめにあたっては、本分野の第一人者である細野先生・広田先生に執筆・編集の労をお取りいただくとともに、各国の経済事情に通じたJICAの職員や専門家の方々にも執筆に参加いただきました。また「質の高い成長」の概念がもつ多面的な要素に応じて、様々な専門性・バックグラウンドをもつ国内外の研究者や実務者の方々、研究機関や関係機関から、バックグラウンド・ペーパーの執筆や関連情報・資料の提供などのかたちで数多くのご支援をいただきました。この場をお借りして、本プロジェクトにご協力いただいたすべての方々に心より御礼申し上げます。

本シリーズが「質の高い成長」の概念について多くの方々が理解を深めるきっかけとなり、日本を含む各国における「質の高い成長」の実現に向けた取り組みの一歩となることを願ってやみません。

2025年3月

JICA 緒方貞子平和開発研究所 研究所長
峯 陽一

はじめに

質の高い成長は、今世紀の初めごろから国際的に重視されるようになった、比較的新しい概念である。国連開発計画（UNDP）が、人間開発報告書と人間開発指数の両方を通じて、成長の質という概念を主流の政策論議に導入し、さらに過去 20 年間に生じた一連の国際的出来事とそれらに関する議論を経て、質の高い成長の達成は公共政策の喫緊の課題へと移行してきたと言える。それら一連の出来事と議論とは、2007～2008 年の世界金融危機、気候変動に関するより説得力のある証拠、ならびに経済成長、貧困削減、環境コストの間の潜在的なトレードオフ等であるが、近年、とりわけ、COVID-19 に代表される感染症パンデミック、一層の所得格差の拡大、災害の増加など深刻な事態が生じ、包摂的で、持続可能で、強靱な社会を実現する質の高い成長の必要性はますます高まっている。

こうして、「質の高い成長」に関する関心は強まり、国際社会における議論も盛んになっている。2010 年に APEC（アジア太平洋経済協力会議）首脳が合意した『APEC 成長戦略』（APEC 2010）の中心的な柱は質の高い成長であった。質の高い成長の概念は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」の多くの側面に含まれている。2015 年の SDGs を定めた文書は、その序文で「我々は、持続可能で、包摂的で、持続的な経済成長、共有された繁栄および働きがいのある人間らしい仕事のための条件を、作り出すことを決意する」と述べている。日本政府が 2015 年に発表した『開発協力大綱』も「質の高い成長」と、それを通じた貧困撲滅は開発協力の重点課題であるとしている。この方針は、2023 年に改訂された『開発協力大綱』にも受け継がれている。

本書は、こうした状況を背景に、国際協力機構（JICA）緒方貞子平和開発研究所が様々な形で関わった国際的な共同研究プロジェクトの研究成果から多くの示唆を得ている。これらの研究は、SDGs が採択された 2015 年前後から行われたものが多い。それらは、SDGs や変革（transformation）、「質の高い成長」の研究に広く関わるものであり、本書で議論しているテーマを研究するために欠かせない参考文献となった（詳細については、巻末の「あとがきに代えて」

『SDGs、変革、質の高い成長』に関連する研究と参考文献」参照)。

本書は、上記のような研究成果を参考にしつつ、JICA 緒方貞子平和開発研究所の「『質の高い成長』にかかる研究」プロジェクトの一環として筆者が行った研究を取りまとめたものである。その際、この研究プロジェクトをリードされた広田幸紀教授が編集執筆中の『質の高い成長概論』を念頭に置いて執筆を行った。質の高い成長に関わる理論や政策についての理解を深めるために、是非同書を合わせて読まれることをお勧めしたい。

本書の主要な目的は、SDGs や変革のプロセスを念頭に質の高い成長に関する考察を行うことにある。主として国際協力の経験に基づいて、包摂性、持続可能性、強靱性といった質の高い成長の本質的属性を考察するとともに、「変革」と「質の高い成長」との関係を研究する。多くの開発途上国は、直面する課題を念頭に、それぞれ独自の質の高い成長と変革のアジェンダに取り組もうとしている。質の高い成長に係る他国の経験や国際協力の経験に基づく教訓は、直接適用できるものではないが、成長戦略を策定し、変革のアジェンダに取り組むための効果的なアプローチを検討するには有益である。それ故に、本書の各章では、これら経験に関する多くのケーススタディを行っている。これらは、議論されている主要課題についての貴重な示唆を提供する。本書では、事例と経験に基づいた、実践的な「中身」、つまり、質の高い成長の戦略とアプローチの具体的内容、そのための政策の策定と実施の方法に焦点を当てた。

本書が「質の高い成長」に関する理解を深めるきっかけとなり、「質の高い成長」実現への具体的アプローチに関する議論の一助となり、日本を含む各国におけるその実現に向けた取り組みや協力に少しでも参考になれば幸いである。

JICA 緒方貞子平和開発研究所
シニア・リサーチャー・アドバイザー
細野昭雄

謝辞

JICA 緒方貞子平和開発研究所における質の高い成長に関する研究は、研究所の北野尚宏副所長（当時）によって企画され、研究体制が整えられた。北野氏の一貫したご尽力に心から感謝申し上げたい。研究を推進する任に当たられた、JICA チーフエコノミスト（当時）の広田幸紀氏とは、執筆準備の段階から、多くの意見交換の機会があり、さらに執筆中も内容についてたびたびご相談する機会をいただき、多岐にわたる貴重な御示唆をいただいた。心からの感謝の意を表したい。

筆者は、「はじめに」に述べた JICA 緒方貞子平和開発研究所の研究プロジェクトの多くに参加する機会に恵まれた。そして、本書の各章は、いずれもこれらプロジェクトの成果をまとめた書籍の一章として執筆した論文を基に大幅な加筆修正を行い、あらためて執筆、編集したものである（詳細については、巻末の「あとがきに代えて：『SDGs、変革、質の高い成長』に関連する研究と参考文献」参照）。これらの研究の過程で行われた、研究会（セミナーや執筆者会合）では、編者のもとより、多くの参加者から、貴重なコメントをいただいた。心からの感謝の意を表したい。また、英文書籍 *SDGs, Transformation, and Quality Growth* の刊行に際して開催されたナレッジフォーラム「SDGs と質の高い成長～誰ひとり取り残さない、持続可能でレジリエントな社会に向けて～」も多くの貴重なコメントをいただく機会となった。パネリストをはじめ参加者の方々にあらためて深謝する次第である。

JICA 緒方貞子平和開発研究所では、上記の多くの研究に際し、歴代の所長、副所長をはじめ多くの方々に大変お世話になった。恒川恵市、加藤宏、畝伊智朗、北野尚宏、萱島宣子、大野泉、高原明生、峯陽一、藤田安男、武藤めぐみ、牧野耕司、宮原千絵、島田剛、山田実、室谷龍太郎の各氏をはじめとする皆様に、研究、編集、出版に関わる様々なご支援をいただいた。心からのお礼を申し上げます。また、本書刊行にあたって、同研究所企画課にて全体調整をはじめ、多くのサポートをいただいた、城後倫子、増古恵都子、光森祥子、石塚史暁、金

潤定、齋藤ゆかり、吉野華恵、須藤玲の各氏に心からの感謝を申し上げたい。

細野昭雄